2018 年度 小委員会活動成果報告

（2019 年　1 月　31 日作成）

小委員会名	環境心理小委員会	**主 査 名**：槙　究 **就任年月**：2017 年 4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	環境工学委員会 （環境心理生理運営委員会）	**委員長名**：岩田　利枝 **主 査 名**：西名　大作
設　置　期　間	2015 年　4 月　　～　　2019 年　3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	・人間・環境系を総合的に扱う環境心理研究を発展させるための組織的取り組みを行う。 具体的には、前身の小委員会で開催されてきた「環境心理チュートリアル」を継続的に開催すると共に、現在までの研究状況を整理し、今後取り組むべき課題および研究発展のための方策を検討して、実施する。 初年度～4 年度： １）環境心理研究に資する情報の提供（チュートリアル開催等） ２）交流活動の推進(公開研究会等) ３）研究状況の整理（若手研究者の研究紹介等） ４）活動体制の検討（環境心理研究発展の方向性の検討等）	
委員構成 （委員名（所属）	**委員公募の有無**：無 主査：槙　究（実践女子大学） 幹事：小﨑美希（お茶の水女子大学） 委員：小島 隆矢（早稲田大学）、上野佳奈子（明治大学）、大石洋之（ジェイアール東日本）、古賀誉章（宇都宮大学）、佐野奈緒子（東京電機大学）、高橋浩伸（熊本県立大学）、高橋正樹（文化学園大学）、辻村壮平（茨城大学）、長澤夏子（お茶の水女子大学）、西原直枝（聖心女子大学）、宗方淳（千葉大学）、渡辺秀俊（文化学園大学）、大野隆造（東京工業大学）	
設置 WG （WG 名：目的）	チュートリアル運営 WG 環境心理生理分野の研究発展のための一助として、様々な研究技法や分析手法の普及と研究レベルの向上を担い、「環境心理チュートリアル」を継続的に開催する。 人類学的アプローチ WG 人類の進化、生態など生物学的な側面を扱う自然人類学および世界の民族の異なる言語、習慣など文化・社会的な側面を扱う文化人類学の両面から、人間 － 環境系の基本的な理解に導く理論的枠組みと事例の収集とその有効性についての討議を行う。 環境心理教育検討 WG 環境心理研究の初学者の理解・習得の過程、環境心理教育事例を検討し、課題の整理と新しい研究実践に対応した教育方法の基礎を構築する。社会への還元をめざし、小・中・高等学校から大学、設計者などに有用な環境心理学的知見や教育方法を検討する。	
2018 年度予算	126,000 円	**ホームページ公開の有無**：無し **委員会 HP アドレス**：

項　　目	自己評価
委員会開催数	環境心理小委員会：３回（年度内開催予定を含む） ・チュートリアル運営 WG：２回（年度内開催予定を含む） ・環境心理教育検討 WG：３回 ・人類学的アプローチ WG：４回（年度内開催予定を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	

講習会	
催し物 （シンポジウム･セミナー等） *能力開発支援事業委員会承認企画	１．第 18 回 環境心理生理チュートリアル「実験のデザインの作法～その実験、大丈夫!?～」（資料名）同上　　参加者数　60 名
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	充分な成果が得られている。 １．環境心理研究に資する情報の提供（チュートリアル開催等） 例年通り、年一回の開催を実現した。（2018 年 9 月 18 日：第 18 回環境心理生理チュートリアル）実験計画についての全体像から実際まで、役立つ情報の提供が成された。 ２．交流活動の推進(公開研究会等) 人間環境学会 第 115 回研究会 「建築人類学のノーテイション（表記法）」を人類学的アプローチ WG が共催した。 人類学的アプローチ WG 拡大研究会「まちづくりのエスノグラフィ：筑波山麓地域の開発プロジェクトを対象として」を 2018 年 9 月 10 日に開催した。まちづくりに現れる人類学的アプローチの展望と限界について議論を深めた。 ３．研究状況の整理（若手研究者の研究紹介等） 環境心理教育検討 WG において、様々な教育手法や問題点を整理する中で、研究紹介の方法についても議論した。 ４．活動体制の検討（環境心理研究発展の方向性の検討等） 人類学的アプローチ WG において、これまでの研究から得られた知見について整理すると共に、今後のアプローチについて議論を深めた。さらに人類学的アプローチを推進する為、次年度は小委員会として活動することになった。 また、環境心理教育検討 WG において、環境心理学の知識・手法等の教育分野を中心とした社会全般への還元方法について、意見交換した。
委員会活動の問題点・課題	１．特になし

2018 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A　　B　　C　　D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	「目標の達成度」においても記述したが、下記の活動を実施し、充分な成果が得られたため、総合評価は A と判断した。 １．第 18 回 環境心理生理チュートリアル「実験のデザインの作法～その実験、大丈夫!?～」の開催 ２．人間環境学会第 115 回研究会 「建築人類学のノーテイション（表記法)」を人類学的アプローチ WG が共催 ３．環境心理に関する、様々な教育手法や問題点の整理と研究紹介方法についての議論の深まり ４．活動体制の検討結果としての人類学的アプローチ小委員会設置申請

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画･目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価･外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。